

「バグダードのユダヤ系知識人と二つの「復興」運動」

日本学術振興会特別研究員 PD（東京大学）

天野 優

本発表では、20 世紀初頭イラクのユダヤ系知識人によるアラビア語・ヘブライ語での言論活動に着目し、中東地域に興隆した言語・民族的帰属・国民意識をめぐる多様な運動が、イラクのユダヤ人に与えた影響の一端を報告した。

20 世紀を迎えたイラクでは、包括的な社会の実現を掲げた言論活動が活発化し、多くの新聞・雑誌が創刊された。こうした動向を目の当たりにしたユダヤ人の帰属意識にも、少しずつではあるが変化がみられ始め、積極的にアラビア語を用いイラクの言論空間に参加する者が現れる。宗教的少数派としてコミュニティの立場維持を最優先し、周辺ムスリム社会の政治的活動からは極力距離を置いてきたイラクのユダヤ・コミュニティにとって、これは前例のないことであった。

なお、当時のユダヤ系知識人とその「アラブ性」をめぐるのは、今日まで大きな争点となっている。「アラブ・ユダヤ人 (Arab Jew)」というアイデンティティは成立しえたのか、それは主体的なものだったのかという問いに対し、ユダヤ人は止むを得ずアラブ化した／コミュニティの方針によって「イラク志向」が推進された、との評価がある一方、ユダヤ人はアラビア語を話し自覚的でなくともその文化を担っていた／イラクにおける歴史や生活に強い愛着を持っていたという肯定的な意見もみられる。

本発表はまず、ユダヤ人が積極的にアラビア語で執筆を始めた背景には、ユダヤ・コミュニティとイラク社会、それぞれの文脈で並行して起きた西洋との接触と、「復興」運動の影響があるとの仮定を整理した上で、とりわけ 1920 年代のバグダードで活動したユダヤ系知識人と、彼らが携わったアラビア語誌『ミスバーフ (al-Miṣbāḥ/ha-Menorah, 灯火)』（1924 - 1929）に着目した。

なおここでは 19 世紀から 20 世紀にかけてユダヤ世界／アラブ世界双方で起きた言語・文学・文化をめぐる諸運動を指して、「復興」運動とした。イラクのユダヤ・コミュニティの場合、西洋との接触は、まず 18 世紀以降ヨーロッパで展開されたハスカラ (haskalah, ユダヤ啓蒙主義) によってもたらされ、その後シオニズムの興隆とともに一層促進された。主に現代ヘブライ語やヨーロッパ諸言語を通して、世俗文学、新聞・雑誌、世俗教育が導入された。パリに本部を置くユダヤ系組織、全イスラエル同盟 (Alliance Israélite Universelle, 通称アリアンス) の教育機関は、顕著な例である。1860 年代以降、中東世界各地のユダヤ・コミュニティに次々と創設されたアリアンスの教育機関では、フランス語による世俗教育が整備された一方、ユダヤ人の解放と近代化を掲げ同化主義を推進していたことから、積極的にアラビア語の教育も行われていた。アリアンスの教育は、ユダヤ人によるイラク社会参入の門戸を広げる重要な役割を果たした。

一方、同時期のアラブ世界では、ナフダ (al-Nahḍah, 覚醒) と呼ばれる文芸復興運動が展開されていた。アラブ世界の周縁に位置していたイラクにおいて、ナフダは必ずしも運動として確立・定着していたわけではない。しかし、1908 年の青年トルコ革命以降、アラビア語新聞・雑誌への

関心が高まり、公教育の整備が推進され始めていたのも事実である。先行研究は、アラブ文化が再評価され、イスラームの過去が世俗化されたことで、ナショナル・アイデンティティとしての現代標準アラビア語の成立が促され、結果的にユダヤ人を含む非ムスリム知識人がアラビア語で読み書きをし、自分たちの立場を表明する動機と機会を与えたとしている。また、これは単にユダヤ人側からの一方的な働きかけであったわけではない。当時のイラクにおけるムスリム知識人の著作においても、同じアラビア語を用いる一市民としてユダヤ人に言及する例は少なくないことから、こうした状況は相互の認識の上で成立していたと考えられる。

なお、イラクで最初に設立された文学・文化を推進するユダヤ系組織は、「ユダヤ文学協会」(ha-'agudah ha-sifrutit ha-'ivrit/ al-jam'iyah al-adabīyah al-isrā'īlīyah)であった。1920年バグダードにて、「ユダヤ人同胞の道徳的水準を高め、ムスリムと密接な関係を維持するにあたり、ユダヤ人の境遇を改善する」という目的の下設立されたユダヤ文学協会は、シオニスト組織を名乗っていた。ヘブライ語／ユダヤ・アラビア語併記の機関紙を創刊したが、5号を最後に廃刊となることから、当時現代ヘブライ語での読み書きがあまり浸透していなかったことが窺える。

その後1924年に創刊された『ミスバーフ』は、自衛という目的の下ユダヤ人がコミュニティの立場を内外に表明する一手段であったとされる一方で、広くアラブ世界における文学の発展に貢献し、ムスリム、クリスチャンの同胞らとの共栄を模索する場としての性格も持ち合わせていた。またこうした紙面の特徴に加えて、本誌の所有者であり後に編集を担ったサルマーン・シーナ(Salmān Shīnā, 1899-1978)が「ユダヤ文学協会」の主要メンバーであったことから、『ミスバーフ』はシオニスト的な媒体だったとされることもある。

イラクのユダヤ・コミュニティを取り巻く「復興」運動、および言語・文化・文学の多元性を示した後、上述の『ミスバーフ』誌に見られる、言説の具体例を検討した。まず、ユダヤ系知識人らが、どのような文脈で「覚醒」という語を用いたのかを概観し、民族的側面が重視される話題ではユダヤ・コミュニティへ、言語・文化的側面が際立つ記事ではイラクとアラブ文学へ、と異なる方向性を示していることが多いことを示した。

このことは、エレッツ・イスラエル／パレスチナへの視座が反映された記事からも見てとれる。本発表では、ベイルート・アメリカン大学に留学中であったアブドゥッラー・シーナによって『ミスバーフ』に投稿された二つの報告を例として取り上げた。シーナは、自身のパレスチナ訪問を報告する記事においてシオニストのパレスチナ入植に言及し、特にその近代的・西洋的な側面を「東洋の覚醒」として好意的に描写する。しかし一方で、ヘブライ大学の図書館にイラクに関連する蔵書がほとんどないことを嘆き、「敬愛するイラクの名を残すため」に、母国のアラブ文学の担い手に向けて「覚醒」を呼びかけている。

別の例として、上述の「ユダヤ文学協会」が主催し『ミスバーフ』が広報を担ったアラビア語演劇が、イラク人一般からも好評を博し、最終的に国王ファイサル1世の来場に至った経緯を取り上げた。ファイサル1世がユダヤ人やシオニズムに対して穏健な立場をとっていたことや、イギリス委任統治政権との関係性も考慮する必要はあるが、西洋文学がもたらした新しいジャンルである演劇を通し、ユダヤ人がイラクのアラブ文化を推進する者として賞賛されたというこの事例は、イラク社会の世俗化に伴い出現した公共空間において、ユダヤ人の存在が可視化され、受け入れられていたことを示していると考えられる。またこの事例を通して、一見矛盾するように

思われるユダヤ・コミュニティ／アラブ世界へ向けた二つのアプローチは必ずしも相反するものではなく、むしろユダヤ人としての民族的帰属意識の強化と主体性の確立が、結果的に周辺イラク社会への参入を後押しするという状況を作り出していた可能性を指摘した。

発表後の質疑応答では、参加者の方々から、当時のユダヤ・コミュニティにおける言語使用状況や、当時のイラク国内政治におけるユダヤ人の立場についての質問などをいただいた。コメントーターの先生方からも貴重なコメントをいただくことができた。中村先生からは、イランでも同時期に演劇が注目されていたとご教示いただいた。また鶴見先生からは、現在から振り返ってみればイラクのナショナリズムに貢献していたユダヤ人であるが、彼らの自己理解はどういったものだったのか、自分たちをどういう繋がりの中で捉えていたのか、という質問をいただき、そうした問いから当時のイラク社会の一側面を浮き彫りにすることも可能ではないかというコメントをいただいた。今回の発表を通して、参加者の方々やコメントーターの先生方から質問やコメントをいただいたことで、今後本研究をより多角的に捉え発展させるための視点を得ることができ、大変有意義な機会となった。